

中村哲医師アーカイブ

\* 西日本新聞連載「辺境の診療所から」第17回（一九九三年五月十四日）

## インシャツラー

人間の分を知る謙虚さ

中村哲

現地では、未来のことを述べるときに、必ずと言えるほど「インシャツラー（神の御心ならば）」という言葉が登場する。「荷物は

〇月〇日までに着くか」と尋ねると、「インシャツラー、着くでしょう」と答えられ、しばしば到着しない。「この仕事を今年中に

はやり遂げよう」と決意を促せば、「インシャツラー、頑張りましょう」と氣勢をそがれ、大抵は間に合わない。

年齢も「だいたい」

年齢もそうで、我々が病院で患者に「いくつですか」と聞けば、一部の知識層を除けば、「だいたい…」で始まって、二十歳・二十五歳・三十歳と五年刻みで述べられるのが普通である。時には「見りゃ分かるだろう」とからから笑う者さえいる。誰も正確な年齢を知らない。几帳面な人間には耐えられぬ世界である。

かくて「インシャツラー」は日本商社マンの敵となり、過密スケジュールでやってくる旅行者やボランティアを悩ませる。「またお会いしましょう」と言って「インシャツラー」と答えられ、怒る者もいた（実はこれは普通の挨拶である）。そこで、大抵の日本人はこれをいい加減きの代名詞と誤解しているが、決してそうではない。

ペシャワールやアフガニスタンに居て、人々の生活に入ると、このインシャツラーが美しい響きを持っていることが解る。そこには、人間の分を弁える謙虚な祈りが込められているのである。距離の概念でも、山岳地帯では「普通歩いて三日、遅い者なら四日」といった表現が正しいし、予期せぬ事態も多いからだ。現実には、「またお会いしましょう」と別れた人間が直ぐに帰らぬ人ともなる。二日予定の山越えが、天候次第では四日になる。フライトが気象の変

### \*表紙写真によせて\*

## 元気に遊ぶ戦争孤児たち

先生の合図とともに、子どもたちが一斉に小さな球を回していく。器用な子は、同時に4個の球を捌いていた。他にも縄跳びやフラフープなど、各々の自慢の技が披露される様子は、さながらサーカスのような活潑とした雰囲気に満ちていた。

表紙写真は、国が運営する孤児院で撮影された1枚である。父親を紛争で亡くし、引き取ってもらい親戚もいない家庭では、母親ひとりで子どもを食べさせていくことができないので、孤児院に預けられる。灌漑事業の現場を訪れる道中にも、空き缶やペットボトルを集めてお金に換えたり、レストランからナンのくずを集めるなどして食い繋いでいる子どもに出会った。治安が改善し、PMSの活動地ではのどかな風景ばかりに目を向けがちだが、紛争が一昔前の話ではなく身近に存在していることを実感させられる。

孤児院に併設された学校の教室にて、ジア医師が将来の夢は何かと尋ねたところ、教師や医者、エンジニアになりたいという声が上がった。銃を手取る以外での選択肢が、彼らの前により一層広がって行くように願う。

化で一週間延びることは山地では稀でない。何が起きても不思議はない世界である。確約はできない。年齢もよく考えれば、人により成長・老化の個人差があるのは当然で、一年や二年の違いに目くじらを立てる事はない。

### 誓いを立てたら…

「急ぐほど被害が多い」と現地では言う。私の経験でもそうで、あまり急いで正確さこだわると疲れるばかり、成果はさして上がらない。それどころか大局を見失って大失敗する。さりとて彼らが約束も守らず、いい加減かと言えば、絶対にそうではない。いったん心に決め、誓いを立てれば、何年かけても我慢して待ち続ける。私は幸いにして田舎の住民から裏切られた経験を持たない。日本人は短気で性急である。これが長所

でもあり、欠点でもある。ペシャワールには一九八八年以来、多くのボランティアがやってきたが、少なからぬ者が疲れて帰ってゆく。大河のようなおどろかさを体得するのに相当時間がかかる。成功はもちろん心地よいが、失敗もまた良し、努力の結果なら悪しからず、別のやり方で繰り返せばよい。さらに、その時は成功と思っても、長い目で見れば良いか悪いか分からない。

### 日本人にないおどろかさ

困難を乗り越えて現地にきたボランティアの方々に失礼かも知れぬが、日本人に欠けるのはこのおどろかさである。はた目で見れば、緩やかだが深く静かに流れる川面で、水しぶきを上げて騒がしく流れにあらがう様子は、正直、気の毒である。観念して神の御心に委ねるべし。どれほど豊かな世界が

## PMSの動き

- 1月29日～4月14日 ミラーン堰の補修工事
- 3月20日 ノーローズ（イスラム暦元日）
- 3月11日～4月9日 ラマダン期（断食月）
- 4月10日～13日 小イード休暇
- 4月20日～5月28日 PMS 支援室員がジャララバード事務所に滞在
- 5月4日 コット事業完工式  
ナー吉安事業起工式
- 5月7日～18日 ガンベリ農場で麦刈り

広がるか計り知れない。現地との基本的な齟齬は、このインシャッラーの精神にある。逆に日本に帰ると私は窮屈である。強迫的な正確さは耐え難く、瑣事を針小棒大にあげつらうのは異様に見える。列車が一時間でも遅れようものなら、乗客は怒り狂い、マスコミは大騒ぎする。金さえ出せばトロテン式に望みの物が手に入り、意のまま気軽に、万事が運ぶものとの錯覚が生まれる。日本列島の住民の立場に立てば、そうしなければ生きてゆけないので仕方がないが、せちがらい世の中になった。この流れに乗らねば、誰かにしわ寄せがくる。だが、なければないで済むものが余りに多いことを、少なくとも知るべきである。それで我々が「進歩している」と思うのは大間違いである。